

傅抱石留学時期の活動

—金原省吾および郭沫若との交流—

成家 徹郎

序

傅抱石は一九三三年九月ころ（二十七歳）に初めて日本に来た。美術関係の資料を収集するのが目的であったようだ。金原省吾の著作もこの時に入手したと思われる。

一九三三年春に帰国し、この年の秋冬のころまた来日した。金原省吾の著作をいくつか読んで、彼の美術論に感銘を敬服していた傅氏は、一九三四年春に金原氏を訪問し、帝国美術学校に入学して、金原氏から美術論を学びたいと、希望を述べた。このうち、金原氏の美術論を真剣に学び、そのいくつかを漢語訳して出版した。また個人的にも敬愛の気持ちをつよく抱くようになった。彼が金原氏に宛てた手紙には、その心情がよく表れている。

傅氏はもと若い時期は、篆刻に精力を注いでいた。特に摸刻の技術は相当高い水準にあると言われた。ただ、彼が篆刻に打ち込んだ一番の理由は、容易に収入を得ることができるところにあった。彼は若い時に書いた著書『摸印学』をなんとか出版したいと思っていた。一九三四年六月五日、郭沫若に紹介状を書いてもらって、それを持って文求堂（東京本郷）を訪問し田中慶太郎に出版していただけないか、と頼んでみた。結局出版されなかったから、婉曲に断

わられたのだろう。そこで六月九日、美術論の師である帝国美術学校教授金原省吾に、どこか出版社を紹介してほしいと頼んでみた。しかし、どこでも出版を引きうけるところはなく、出版は実現しなかった。

一九三五年五月、金原氏や郭沫若、文求堂田中慶太郎の援助を受けて松坂屋で個展を開催した。予期した以上の成功であった。ところが、その六月、母の病状がかなりよくない、という知らせを受けて急遽帰国した。本人はすぐもどって来るつもりであったが、経済状況がそれを許さなかった。

傅抱石は一九三三年九月ころ日本に来た。その一二月に、郭沫若に会おうとしたが実現しなかった（郭氏は千葉県市川市に住んでいた）。一九三三年一月にはじめて郭氏と面識を得た。この時から両氏の交流が始まった。

郭沫若が文求堂に宛てた書簡の中に、傅抱石に言及するものが六通存在する（うち一通は慶太郎の次男震二あて。『郭沫若致文求堂書簡』）。またアジア・アフリカ図書館郭沫若文庫（三鷹市）には、傅抱石が郭氏に謹呈した印譜『傅抱石所造印稿』が所蔵されている（図一）。これには謹呈したときの日付（年月日）が書かれている。

傅抱石に関する著作や年譜がこれまでたくさん出版された。しかしそれらを見ると、日本滞在中の活動に関する年月が諸本によって食い違っている。それらの著者はまだ郭沫若文庫蔵『傅抱石所造印稿』を見ていない（存在を知らない）ように思われる。

また、郭氏が田中慶太郎に出した書信もたいてい月日のみで年が書かれていないものが多い。『郭沫若致文求堂書簡』の編者は書簡の内容を見て前後関係を考えて、古い順に配列したつもりだが、この配列に矛盾がある。編者も郭沫若文庫蔵『傅抱石所造印稿』の存在を知らないようだ。

傅抱石の恩師・帝国美術大学（いま武蔵野美術大学）教授・金原省吾の日記にも傅氏に関する記述がたくさんある。

いま、傳抱石に言及している致文求堂書簡六通、傳抱石が郭氏にあてた書簡一通、と『傳抱石所造印稿』に記された日付および傳抱石が金原氏に出した手紙、金原日記を併せて考察し、傳抱石が日本にいた時期における傳氏の活動について追究した。そうすると、傳氏の日本における活動の年月についてかなり正確に確定できる。年月日が記されている郭沫若文庫蔵『傳抱石所造印稿』は、致文求堂書簡六通の前後関係を考える上で決定的役割を果たす。

傳氏は帝国美術学校在学中の一九三五年六月に帰国し、それ以後日本に来ることはなかった。なお傳抱石の娘・傳益瑤女史は日本に居住し画家として活躍されている。

傳抱石が日本に留学した目的は、絵画について金原省吾に学ぶことであつた。特に彼の絵画理論に心酔していた。よつてまずその絵画理論を簡単に紹介する。

一 金原省吾の美術論（金原省吾著『東洋畫』、『支那繪畫史』）

1 東洋画と西洋画のちがひ

東洋芸術の形体は、小泉八雲氏が言う如く、形成中の形体である。形成し終つた形体、完成しつくした形体ではない。完成し尽くした形体、即ち存在形体として描くのは、西洋画である。西洋の画面は、既に完成した形体を描いている。如何に形成せらるべきかという、未来の形体ではない。現在完結した形体である。西洋の画布は、絵の具の保持体である。幾度も幾度も重ねて塗られ、そして一定の効果に達する迄、塗られるのである。然るに東洋の紙は之と異なる。絵の具や墨を保持するのでなくて、絵の具や墨と一緒に成つて、芸術形体に融け入るのである。故に東洋画で紙の上に、墨の一点を打つのは、紙に墨の一点を保持させるのではない。紙の中にある紙の性質を、墨で動かす

(活かす)のである。墨は紙を動かすばかりではない。紙によって自らも動かされるのである。紙に墨をつけるとは、紙と墨とを一緒にして動かすのである。西洋画の画面は、絵の具の上を築いて行くのである。東洋の画面は、絵の具の上に絵の具を築いて行くのではない。絵の具や墨が紙と共に動くのである。随って西洋の画面は、構成せられた形体を示し、東洋の画面は、これから形成せられて行く形体を示している。絵の具と墨とが、紙と共に動いているから、その形体は固定されない。故に東洋画の形体は、これから形成されるものを示すのである。これが蓋し「形成中の容貌」の意味であろう。

東洋画が「瞥見した形体」を描くというのは、決して東洋画の軽率を示すものではない。瞥見するには、瞥見するだけの用意がある。他の例を以って言えば、茶室の花がある。

花瓶の花の如きも、書院にては、立花、生花を用いると雖も、草庵にては、挿花と称し、無造作拙速の花を用いる。蓋し花はもと、一時(いつとき)、目を慰むるに過ぎざれども、しかも生花者流は、なるべく長時間之を活かし置く、を本意とし、茶家にありては唯瞬時の興に備え、幾分か禅味をふくむものの如し。故に「花を生くる(花をいける)」と云わず。俗に之を「擲入(なげいれ)」という也。三齋公、夏の茶会に、朝顔の花を入れられ、会席の参加者に対して、^花花ははや、しほれたり(萎れたり)や(花はもう、萎れてしまいましたか)と尋ねたら、其のまま見事なる由(まだそのまま見事に咲いていますよ)という答が返ってきた。それは面白くないことだ、取入れなさいと指図して、歌を詠んだ、

よしさらば散る迄は見じ山桜、花のさかりを俤にして

(それならば、散ってしまうまで見るのはよそう。山桜が満開の情景をおもかげにして。)と口ずさまれし如き、思ひ見るべし。

〔岡崎淵沖〈谷神庵〉『点茶活法』博文館一九〇一年二月〕

この消息は、瞥見の中に、永劫なるものを捉らえようとする用意である。

2 日本画と中国画のちがひ

馬遠、夏珪は共に蒼勁体であるが、特に夏珪は筆法蒼老、墨汁淋漓である。しかし両家の作品を比較すれば、その間には自ら相違がある。第一に線である。馬遠の線は、最初の意志が最後まで保持されているが（図二）、夏珪にはそれがなく（図三）、最後において任意に放散させている。故に線は起点と終点とでは、著しい差のある、継続状態をなしている。馬遠の如く重さの継続ではなく、重さの走りをなしているのである。第二に夏珪の線はかかる激変による持続であるから、相当に長い線は、以上の如き線の接合によつてなされる。しかもその接合が明瞭であつて、その線は切れ切れに続くか、或は激しい折線状に続くかである。されば人人はその画面の到る處に、線の生起と終末とを見るのであるから、全画面を線の集合として感ぜしめる。かかる線であるから、ここに禿筆があらわれる。禿筆が尖筆に比して、蒼勁体と称せらるる、線圧（筆圧）の世界を拓くに適するは言をまたない。

雪舟が絵画を学ぶ注意をのべたものの中に、山水画は物古りたる感があつて、「幽微」なのがよい、幽微の趣を得るには、筆がるに（筆軽に）馬遠や夏珪の作風を基礎として学ぶことと、「目前の景色（けいしよく。情景）」を師とすることが大切であるといつてゐる。故に雪舟は絵画の伝統を宋の馬遠夏珪に置くことと、目前の景色を写生することとを以つて幽微を得る所以であるとしてゐるのである。画を幽微ならしむるために、目前の景色を師とするという事も、趣の深いことであるが、これは此處では問題の外に置いて、伝統の方を吟味する。雪舟は馬遠夏珪に学

ぶことを第一の大事と見ているが、その学び方には、「筆がるに」と書き添えている。

筆がるに馬遠夏珪などの筆の跡をもととして、御学び候が第一の御稽古にて候、と言っている。これは注意すべき事である。

然らば馬遠夏珪の画風はどうであつたか。馬遠と伝えらるる岩崎家蔵の「風雨山水図」や、井上家蔵の「独釣図」(図四)を見る。是等について私はかつて次ぎの如くに記した。

岩崎家蔵の「風雨山水図」も、前景の樹群に対立する岩山があつて、屹立している。前景は例によつて此の画の存在性を示す明瞭確實な存在である。中景はない。遠景は近景と直接に対立するが、輪郭線を消失して、堅い一つの面となつて居る。無限なる非存在性は、遠い山の面をつつみ、そして霧の形で近景の間に侵入して、自分の調子で包もうとして居る。主要なる形体は骨法を露わにした線でかいて行くが、一つの物と物との間には、雨霧の介在があつて、遠近関係をわけて居る。岩の中に一条の道があつて、其處を傘を傾けて人が行く。岩をかくと同じ秃筆で、同じ心持で小さい形体ではあるが、堂々と描いている。遠近を異にする山と山、木と木、木と山との間に必ずある霧は、皆連絡して、高い天空に続く。空間はすべての存在の間に侵入して、凡てのものを浸し、その空間は一樣の大きさで宇宙に連なつて居る。偉大は存在せるものよりも、存在せざるものの中に、湧きいづるのである。

かかる偉大のよく示された作に、また井上家蔵の「独釣図」がある。一艘の船が太く濃く、何の咏嘆もなく、沈痛に画いてある。船の周囲には、浪がある。船の上には蓑や笠があつて、しつかり編目まで画いてある。船のはしに一人の男がすわつて、絲の行方を見つめている。思慮のある澄んだ顔である。それだけで後は一面の空間である。広漠たる空間の中に、一艘の船が居るのみである。船あつてその空間は非常な広さを持つて来る。船はその広さをはつきりさせる為に、その身をあらわして居る。しかもそのはかない船が、堂々たる主張でかかれて居る。実に不思議

議な画である。夏珪と共に彼の様式が蒼勁体と称せらるる所以を知り得る。

されば馬遠は、茫漠として普遍なる空間を、各存在の間に導き入れる。そしてそれを空間の広大さに浸された存在としている。即ち画面の存在たる各形体は、非存在の空間、当為の空間によって、永遠に存在する形体となったのである。しかしこの画面上の形体と、それを浸す空間とは、何れも明かに対立して、別個の系統をなしている。故に画面が力体となるために、此處には対立する二つのものが、組織的に結合せられて居ることを感ずる。

3 日本画の特徴

土佐は輕軟なる道で、己を尽している。雪舟は沈着なる道で己を尽して居る。【中略】

この骨法（中国の伝統技法）の伝統は、我が国に移されて来る。如何なる国の文明も、外来の影響なしには發達する事が困難である。我が国もこの意味で常に他の影響の中で、發達して来た。然らば、この宋風の画の影響は如何にあらわれたであろうか。

我が国は唐画の伝統を白鳳奈良以来、絶えず受けていた。これを徐々に日本化して、土佐の画風を作った。この土佐派を作る日本化の働きの中で、最も著しいと考えられる特色は、第一に線の輕軟であり、第二に色の平淡であり、第三に構図の率直である。これは唐画の中にあつた力の構成的な要素を、線の上からも、色の上からも、画面全体の構成の上からも、輕軟にしたものである。換言すれば、力を組みはづしたのである。力を組みはづすとは、力の永劫的な構成を、利那的な構成にかえる事である。線を輕軟にするとは、永劫的な力の主張持續を、卒然として利那の發現として、組成することである。色の平淡もまた同一であつて、色を永劫の相から、利那簡素の相にかえす事であ

る。卒然たる存在の中に、色を支持する事である。第三の構成の率直もまた、組織的に全体に行き渡って居る力を、突然生起した力の状態にかえて、その卒然たる力の構成によつて、自由なる力の流動たらしむるのである。この力の組みはづしが、土佐派のなした日本化の内容である。

(これは画ばかりでなく、書の上にもまた同様にあらわれている。仮名書の風が之である。)

然るにその後日本に渡来した、漢画風の影響に対しては、雪舟はまだ日本化の働きをなしていない。しかも雪舟の中にも、この日本化の萌芽は、既にあらわれて居た。「筆がるに」馬遠夏珪を学べ、といったのが之である。「筆がるに」とは、力の組みはずしを意味する。この「筆がるに」の意味は、漢画の日本化に対しては、主要な位置を占むものである。如何となれば、漢画は色を重んぜざる、墨画風のものであるから、筆がるに馬遠夏珪の風を学ぶとは、線に集中せられたこの宋風の骨法を、力の組みはずしによつて学ぶことである。故に、筆がるに学ぶとは、単に画の一部分に対する注意でなくて、むしろ画の全体に対する注意となるのである。

構成に就いても同一であつて、筆で描き上げて行つた画面であるから、之を筆がるに描いて行く事は、また構成をも、打ちくつるがすことになる。雪舟の画面が堂々と画き進められて居るにも係らず、落ちついて、打ちくつるいだ處のあるのは、彼の主張を明かにする。故に雪舟の画は、未だ十分に力の組みはずしをなし得ては居ないが、その意向の中に、既に日本化の要求は生じていたのである。

二 傅抱石 日本滞在時期の活動

一九三二年秋（九月ころ）

傅抱石、初めて日本に来る。あちこち見学し、資料収集の活動をした。しかし資金が乏しいので長く日本に居るのは困難だった。

一二月、郭沫若に会うつもりで市川に向かったが、途中で警察に拘束された。

(葉宗鎬『傅抱石年譜』〈増訂本〉による)

一九三三年一月

傅抱石、郭沫若と初対面。

一九三三年春頃

傅抱石、帰国。

この時期、『傅抱石所造印稿』の表紙題字、扉題字を、呉梅と黄侃に依頼した。

一九三三年秋冬の頃

傅抱石、日本に来る。

一九三三年

致文求堂166号書簡(二月一八日)(図五)。

篆刻家傅抱石(細字を良くほる、また絵にもたくみである)がそちらへ尋ねてお話ししたいとのこと。また河井荃

廬氏に会いたいと言っているので紹介していただきたい。

子祥仁兄惠鑒（子祥は田中慶太郎の号）

頃有中国篆刻名家傅抱石君（尤善刻細字、且工画）欲与尊臺一談、

特為介紹。

又傅君欲晤河井荃廬氏、能為介紹尤禱。

專此、順頌

大安

郭沫若頓首

十一月十八日

封筒に「傅抱石君面呈」と書かれてあるので、傅抱石がこれを持って文求堂を訪問したと思われる。（『郭沫若致文求堂書簡』は一九三四年に入れる）

一九三四年三月二六日

傅抱石、金原省吾と初めて対面。（図六、金原夫妻『傅抱石全集』（『金原日記』）

三月三〇日

〳傅抱石君くる。これは研究科志望である。〳『傅抱石所造印稿』を謹呈した。（『金原日記』）

四月

帝国美術学校入学

四月一三日。〳傅抱石君来る。勉強の打合せをした。〳（『金原日記』）

五月二二日

傅抱石、金原氏を訪問。家庭の経済的に苦しい状況について話した。（『金原日記』）

傅抱石が謹呈した写真（図七。）「金原先生有道惠存。後学傅抱石謹呈。甲戌仲夏之月」と記す。（『傅抱石全集』）

一九三四年六月

致文求堂92号書簡（六月五日）（図八）『文求堂主人・田中慶太郎』。

傅抱石が自著『摸印学』を持って文求堂を尋ねるので、出版について配慮してもらいたいむねの書簡。傅君は、条件についてうるさいことは言わないそうです。ぜひご配慮ください。

逕啓者、傅抱石君有『摸印学』一部、欲在此間出版、不識貴堂能承印否。

特為介紹。如貴堂樂意承印、據傅君云、条件可不拘、請酌裁。專此、即頌

刻安。

郭沫若 六月五日

田中子祥先生

附白 「函録」原稿本已妥収、丹翁信亦接読。

外、原稿数紙并附上、乞査収是幸。

沫又及

この封筒に、「煩抱石兄持交 田中慶太郎様 沫若手奏」と書かれてあるので、郵送したのではなく、傳抱石がこれを持って文求堂を訪問したと思われる。

(成家徹郎『説文解字の研究』後編で、巻頭図版にこれを掲載した。そして安易に『郭沫若致文求堂書簡』に従って一九三三年のものとした。ここで訂正してお詫びする。)

六月九日

傳抱石、金原氏を訪問。『摸印学』を日本で印刷したいが、どの位で出来るかといふから、大文堂にきくといふことにした。これは四六で百頁位か。『(金原日記)』

六月一四日

傳抱石、金原氏を訪問。『摸印学』の印刷のことも話し合った。『(金原日記)』

六月一五日

傅抱石、金原宅を訪問、金原氏は不在。

六月一九日

傅抱石、金原氏を訪問。松坂やで個展をやりたい、という希望。（「金原日記」）

六月二三日

傅抱石、金原氏を訪問。（「金原日記」）

六月二九日

傅抱石、金原氏を訪問。

学校で手紙かく。傅抱石君の証明書を江西省主席の熊氏宛にかく。（「金原日記」）

七月一日

傅抱石、金原氏を訪問。四日に帰国すると告げる。

七月六日に長崎で乗船して、上海へ向かう。（「金原日記」）

傅抱石、金原先生宛ての書信【一】七月二〇日（部分、図九『傅抱石全集』。以下、書信はみなこれに依る。）

「概要」尊敬する金原先生。上海で一度お手紙を差し上げました、着いていると思います。本月十日に南京へ行き、昨日、南昌に着きました。旅行中、平安無事でした。ご心配はいりません。大著『唐宋之絵画』すでに上海商務印書館から出版されることに決まりました。先生の高名は中華にあまねく知られております。小生、日本にかえりましたら、再び翻訳をやります。大作「線の研究」は中華の画家とて有益に違いありません。小生、上海、南京など各地で先生の高深の学理についていつも紹介しました。小生は長期にわたって先生について研究を続けることが強い願望であります。銀座松坂屋の場所の問題、すでに決定したのかどうか、くわしくご通知いただきたく思います。日本の美術雑誌に、先生が一文を撰してご紹介いただけたら、これに勝る喜びはありません。後学傅抱石拜。七月廿日。

傅抱石、金原先生宛ての書信【二】八月

「概要」尊敬する金原先生。小生、先月二十三日に南昌に着いて以来天気は非常に炎熱で、毎日百度になる以外に、中国の家屋の造りも不快になっております。二週間、家に居るものの、絵をかくとか本を読むなどの努力はしておりません。小生、南昌で各方面の名流学者たちと会いましたが、先生の偉大な学問を理解していない人はおりません。先生に教えをうけることはわが人生において最大の幸福と考えております。先生のご研究について万分に敬服しておりますので、特に先生研究の精神にはさらに景仰しております。それゆえ「唐宋の絵画」「訳者序」の中で特別に記述しました。先生治学の勤勉なこと、中華士子「懶惰之病」に対して薬になつてほしいと願っています。先生著したところの「支那美術史」（先に「中国」と書いたがあとでその上に線をひいて脇に「支那」と書いた。…成家注）、小生、一日も早い成功を祈ります。来年は帰国して、中央大学において芸術科の職務につく必要があるかもしれませ

ん。この科には「中国美術史」課程があります。小生、秋のころ、「中国美術史略」を編集したいと思っています。そうすれば将来の教学に便利です。いま先生にすでにこの大著がありますので、小生まずこれを漢文に訳します（十月になりましたら、翻訳を始められます。）出版されましたら、来年には使用できます。（以下、今後の翻訳計画について書いているが、省略する。…成家）

傅抱石、金原先生宛ての書信【三】八月一日（書信二と同時に投函？）（部分、図一〇）

「概要」小生、家が清貧であることはすでに先生に申しました。このたび帰国して要求した補助ですが、何も成果はありませんでした。小生、家に対して負担がありますが、幸いなことに、妻すでに美術専科音楽系を卒業して中学の音楽教師になりました。そのため、家庭の責任に対してやや軽減になります。しかしそれでもまだ、非常に大きな困難があります。もし特別の機会がなければ、理想とする留学の期間は、たしかに実現は不可能です。小生、九月前に東京へかえります。先生に購入を依頼された書籍五品のうち二つは必ずお持ちします。山口先生の印泥および銅印も同時に購入しました。展覧会場、先生のおかげで成功しますならば、将来もし小生に進境ありますならば、先生の大徳は永遠に強く肝に銘じます。今日、先生のお手紙いただきました。そこですぐに訳して母、妻子知人に聞かせました。彼らはみな先生に無限の敬服をいただき発展を祈っています。（以下略）

（傅抱石、九月にまた日本に来了。）

九月八日

傅抱石、金原氏を訪問。（「金原日記」）

九月一〇日、一五日、一六日、二七日

傳抱石、金原氏を訪問。（「金原日記」）

一〇月四日、一八日、二二日、二六日、三〇日。

傳抱石、金原氏を訪問。（「金原日記」）

一九三四年孟冬月

傳抱石が『傳抱石所造印稿』（図一、全二冊。アア図書館所蔵）を東京から郭氏に郵送した。
このトビラの前の一葉に次のように書かれてある。

「 郵呈

沫若先生 方家教政

甲戌孟冬月後学傳抱石記于東京

甲戌は一九三四年である。

表紙には「癸酉夏至。呉梅。」とある。

〔注〕呉梅（一八八四～一九三九）

字は瞿安、また霜厓。長洲人。（林申清編『中国蔵書家印鑑』上海書店一九九七）

扉題字

「癸酉中夏 黄侃署」

〔注〕癸酉は西暦一九三三年。

黄侃、字は季剛。

一九三三年には、南京にあった中央研究院歴史語言研究所に勤務していた。（胡厚宣「黄季剛先生与甲骨文字」『伝統文化与現代化』一九九四年二期 中華書局）

傅抱石、金原先生宛ての書信【四】十一月一日

東京小石川にあった中華留学生宿舍から出したはがき。

〔概要〕金原先生。前日（三十日）先生が話したお手紙きのう発送したはずですが、今日まだ受け取っていません。おそらく郵便の遅誤のせいでしょう。小生、準備は一切完了しました。ただお手紙を待つばかりです。着きましたらすぐに国内に電報を發します。お手紙を切に待っております。十一月一日。

一九三四年十一月二日

傅抱石、金原氏を訪問。

一九三四年

致文求堂198号書簡（十一月五日）。

劉體智氏が贈ってくれた本、転送されて受け取りました。感謝。

追伸として、

傅抱石君はおそらく来ることはできないでしょう。彼は経済的に困っているので、文化事業部補助学費を得る方法はないでしょうか、と聞いている。

大札奉悉、劉體智氏所贈書蒙転致、亦收到。諸費清神、謝甚謝甚。

專復、即頌

刻安

郭沫若 十一月五日

傅抱石君恐不能来、彼欲得文化事業部補助学費、不識有法可設否。

（『郭沫若致文求堂書簡』は一九三五年に入れる）

一九三四年二月六日、一二日、一七日、二二日

傅抱石、金原氏を訪問。（『金原日記』）

傅抱石、金原先生宛ての書信【五】 一二月二九日

〔概要〕尊敬する金原先生。二十七日、小生は岡登氏と同行して松坂屋に行き、沢田東作氏に会い、展覽会場につい

ですすでに申し込みました。一月十五日ころ決定するでしょう。(一切の手続きおよび費用は、先生がおっしゃったことと同じです。)岡登氏がいうに、沢田は彼の親戚であるので、決して失望させることにはならない、と。小生、とても心配なことがあります。明年六七月のころ、一度帰国しなくてはならないかもしれません。もし松坂屋が不可能なら別のところを打ち合わせしてよいです。先生が岡登氏にお手紙を書きさいに、私のために頼んでいただけのならば、大変うれしく思います。小生はすでに「へ——」を読む」という一文を完全に華語に訳して書き上げました。中華雑誌に寄せて掲載してもらおうつもりでいます。小生、いまこの休みの間に「石濤」を研究します。まずその「評伝」を書き上げます。ただし容易なことではありません。橋本関雪氏(彼が編集した「石濤」一書があります。)はこう言いました「石濤の評伝は、書こうと欲しても不可能である。」小生いま勉強していますが望があるかどうか分りません。今日、雪が降っているのでお宅にうかがうことができませぬ。傳抱石。十二月廿九日。

(成家注・橋本関雪著『石濤』中央美術社一九二六。題字は錢瘦鉄が書いた。)

一九三五年一月四日、九日、二五日

傳抱石、金原氏を訪問。(「金原日記」)

一九三五年二月五日、二四日、

傳抱石、金原氏を訪問。

二月 金原省吾著『唐宋之絵画』、傳抱石の漢語訳が出版される。商務印書館 上海

金原『支那絵画史』「序」に、この傳氏の翻訳出版について言及あり。

一九三五年三月

郭沫若『西周金文辞大系図録』出版（文求堂）

一九三五年三月五日、一七日

傅抱石、金原氏を訪問。

三月二五日

〃抱石君、（展覧会の）会場きまって喜んでいる。

（五月一〇日―一四日。松坂や）〃（「金原日記」）

三月三〇日

傅抱石、金原氏を訪問。（「金原日記」）

四月九日

傅抱石、展覧会開催が決まったので、祝賀夕食会を主催した。金原氏を招待。

〃もう人達はそろっていた。郭沫若氏もみえた。これは中中しつかりした学者らしい。それでいてくだけた人である。その上、下にねばりのある感でよい。（「金原日記」）

四月一四日

抱石君より銅印もらう。(金原日記)

四月一五日

抱石君の展覧会の推薦状をかき、正木直彦氏のも代筆した。夜とりに来た。(金原日記)

〔注〕正木直彦(二八六二—一九四〇)

一九〇一年—一九三二年、東京美術学校の校長を務めた。その後、隠退。

一九三五年

致文求堂184号書簡(四月一七日)。

傳抱石から手紙がきた。田中氏の篆刻評語をいただきたい。また河井仙郎からも感想などを教語いただきたい。そして傳抱石から郭氏にきた手紙も一緒に同封した。

ついでに「大系」増訂版の話。梅原末治氏が「越王矛」を送ってくれました。撮影が終わったら梅原氏に直接送り返していただきたく、お願いいたします。

頃得傳抱石氏来信。言前日所拜托關於篆刻評語、懇於二十二、三日賜下。又盼能転托河井仙郎氏賜題教語。来函照転、乞一過目。

再者、梅原氏已将「越王矛」寄来、別封寄上、請攝影（縮小亦可）、將挿入増訂版「大系」中也。攝影後、直接寄還梅原氏為禱。草草。

沫若 十七日

傳抱石が郭沫若に書いた書簡（『文求堂主人・田中慶太郎』に凶版、『郭沫若致文求堂書簡』に釈文が収録されている。）

九日晚間おせわになりました。昨日、金原氏がすでに文字一篇を送ってくれました。田中氏と河井氏の評語をはやくいただきたいので、催促してほしい。二十二、三日にいただければありがたい。

友人・呉履遜、徐旅人（高師学生）がうちに尋ねてきたが、あいにく私は学校に行っていたので会えなかった。今日午後にそちらを訪問するのでよろしくおねがいます。

沫若先生有道尊鑒。敬啓者、九日晚間備蒙訓導、曷勝感激。日昨金原氏已送来文字一篇、正木氏亦已由岡登氏将原稿請予過目署名。前承先生代請田中先生及田中先生転請河井氏写関于篆刻評語（或題一二句亦可）、擬乞撥冗代促一声、能在二十二、三日賜下則大佳也。又尊題拙作已付攝影、一俟送来、即転呈元覽。呉履遜先生前晚同一江西人徐旅人（高師学生）駕敝居、適往学校、未遇。今日午後擬去問候并假画二幅。專此、敬叩道安

兒傳抱石頓首

四月十六日晨

一九三五年五月四日

傳抱石、金原氏を訪問。

傳氏は作品写真帖を差し上げた。そしてその中に「奉呈之辞」を書いた。

「乙亥五月東京で個展を挙行するにあたって吾師金原先生には、非常之援助をいただき感激は無限であります。ここに作品写真を一冊記念としてささげます。一九三五・五・四 後学傳抱石呈。」

一九三五年

致文求堂186号書簡（五月九日）（慶太郎の次男・震二にあてた書簡）

〔原文のまま〕

端書接手。寿県所出楚器の一枚も放大し度いと思つてをりますので明日傳さんの展ラン會をみ二行く前に御宅によりますからその時御議致します。大抵午前十一時頃。早起は御氣の毒でせう。五月九日。郭沫若。

一九三五年五月。

銀座松坂屋で個展開催（五月一〇日―一四日）。〔金原日記〕

一九三五年五月一〇日（個展会場写真、図一一『傳抱石全集』）

金原氏、銀座松坂屋に行つて傳抱石の個展を見る。

今日一日で三百円位うれた由。抱石君よろこんでいる。〔金原日記〕

一九三五年

致文求堂188号書簡(五月三一日)。

「大系」図録の件。

傳抱石の個展はあなた(田中慶太郎)のおかげで大成功でした。

「御封書拝誦(読)」。拙稿一葉確かに受取。

舎章鐘は166葉に跨ったのでその一

葉をも寄すように御願ひします。

傳君の個展に色々御尽力下され、

傳君としては金銭以上の収穫を

得たと僕は思つてをります。今後も

御引立てであげて下さい。31/V」

一九三五年六月一四日

傳抱石、金原氏を訪問。

一九三五年六月二〇日

抱石君、母上病あつしとの知らせをうけて、二十四日に国にかへるとのこと。或は間に合はぬかといっている。君のために、一路の平安を祈る。紙や画などを持って来て、あづけて行つた。九月下旬またくる由。(「金原日記」)

七月、傳抱石の母病没。

一九三六年

傳抱石、金原先生宛ての書信【六】一九三六年二月七日

「概要」尊敬する金原先生。一月三日、本を送っていただき非常に感激しました。抱石、去年十月から国立中央大学の中国美術史および国画概論を教授しています。しかしこれは抱石の志ではありません。「中国絵画理論」はすでに出版されました。将来かならず一冊購入して謹呈します。(成家注…行間に小字でこう書きくわえている。「すでに一冊購入しました。この信と同時に郵呈します、御笑納御高評おねがいます。」先生指教。抱石帰国して以来、「中国美術年表」を完成しただけで、ほかに何も著作していません。ただ心緒不寧のみです。一事おねががあります。先生に迅速に処理していただきたい。すなわち抱石は中央大学で教授の任についていますが、民国の条例により、「卒業証書」、「著作」などを「教育部」(中華民国文部省・成家注)に提出して審査を受けなくてはなりません。もし資格が合わなければ、学校からの招聘は不許可になります。抱石書くべき資格(即出身学校)は、日本帝国美術学校「研究科卒業」です。抱石、国にかえるとき、ふたたび東京へ行くことができなくなるとは知りませんでしたので、先生にたいして証書の発給を請求しませんでした。いま先生が「卒業証書」一枚(成家注…小字二行書きで以下のように書いている。「研究科目(如美術史、画論など)及び研究年限を書かないように願います。」)を送っていただきました。抱石が先生宅にあずけてある作品ですが、保存をお願いします。抱石、今年の暑中にあるいは一度東京へいくかもしれません、まだ分かりません。通信処は左記の地名であります。「中華民国 南京 国立中央

大学校芸術科 傅抱石様 傅抱石拜 二月七日（成家注…追伸として小字で書き足している「南画鑑賞十二月号一冊
くだされませんか。もし先生にこの書ありますならば」）

傅抱石、金原先生宛ての書信【七】一九三六年四月二二日（図一二『傅抱石全集』）

「概要」尊敬する金原先生。病のため一度南昌の家へ行きました。先週やつと学校にもどり授業をやっています。本
および卒業証書を送っていただき感謝の念にたえません。また先生に激励のことは、同学会には記念文章を贈って
くださり、深く感激しております。先生が今年提出した博士論文、抱石これを聞いて 光栄に思います。かならずご成
功するものと祈っております。抱石が担当する課は中国美術史で、毎週三時間講義があります。いま六朝時代まで来
ました。来週には先生の「六法論」（支那上代画論研究を基礎にします）を講義することができます。この講義稿は
夏季休暇のとき、先生に送って指導と修訂をいただくつもりです。帰国以来、母の葬儀あり、また種々不愉快
のことあり身体上に対して非常に不健康に感じております。とても痩せて東京にいたときのようなではありません。
よってたくさんの研究計画は進行不能です。先生は前と同じく健康であると存じます。夫人および諸公子も健康で楽
しく暮らしておられること、祈っております。傅抱石拜。四月二十二日。（成家注…小字で書き加えている。「きたる
六月の中に支那歴代古物の展覧会があります。場所は南京。今度は支那国宝の第一次公開ですから、先生の御来遊願
います。私は南京滞在の一切（案内、食宿）を負担します。」）

傅抱石、金原先生宛ての書信【八】一九三六年四月二四日

（紙二枚に走り書きした筆記。葉と絵画用毛筆を要望する内容。書信七と一緒に郵送したものと思われる。）

傅抱石は帰国後、一時、郭沫若の秘書を務めた。(郭沫若は一九三七年七月二十五日に帰国した。)

一九四一年四月一日

国民党軍事委員会政治部第三庁が正式に成立した。郭沫若が庁長に就任した。そして陽翰笙を招いて主任秘書とし、傅抱石を招いて秘書とした。

(龔繼民、方仁念『郭沫若年譜』上冊 天津人民出版社一九九二、388頁)

三 参考資料

王莉「傅抱石が郭沫若のために創作した巨幅画が文物専門家の関心を集めている」『中国文物報』二〇〇一年四月二二日

北京・郭沫若記念館に収蔵されている傅抱石の巨幅画が、文物専門家の関心を集めている。四月一九日、十余名の文物保護専門家が招かれて、この巨幅を含む記念館蔵文物の保護のために尽力してもらいたいと要請を受けた。

この「游九龍淵詩意」と題された作品は、一九六五年に傅抱石が郭沫若の新居客間のために描いたもので、傅氏逝去の半年まえのことである。この巨幅は丈二宣(約3.3×1.4メートル)の山水画大作であり、傅抱石の二番目に大きい作品である。(図一三『傅抱石全集』一番大きい作品は人民大会堂に現存する。)

郭沫若記念館館長・郭平英が語るところによれば、郭沫若と傅抱石は一九三二年に初めて面識を得た。詩人でもあり学者でもありさらに書法家でもあった郭沫若は、絵画芸術についても非常に高い鑑賞能力があり、二人は詩画合璧

(共作)の傑作を少なからず残した。抗戦時期の一時期、共に生活して、書画の義売(チャリティー展示即売)を挙行して、国難を救うために貢献した。

郭沫若は「竹蔭読画」という散文の中で二人の友情についてこう描写した。

傅抱石は、私が見たところ、標準的な(典型的な)中国人芸術家である。彼は多才多芸で、篆刻もできるし、また書画もでき、文事に優れている。そして飲酒を好む。ところが典型的な貧乏人で、一に困窮、二に困窮、第三もやはり困窮である。抱石は自分が描いた作品をすべて抱えてもつてきて私に見せたことがあった。いくつかの作品について私に詳しく説明した。ここで鑑賞のことを言うのではなく、ただ驚嘆したことを言いたい。たしかに精神は物質に勝る。あの蒼白で明らかに栄養不足の抱石のどこからあの絶倫の精力が出てくるのだろうか? 数十幅の絵は、私の眼前でまるで電光のようにひらめき輝く。あのちっほけな農家屋がまるでいまにも爆発するのではないかと感じられる。

彼らの「翰墨之交」は、新中国成立後もずっと中断なく続いた。六〇年代、郭沫若は北京什刹海前海西街(いま郭沫若記念館)に移った。広くゆったりとした客間の壁面に一幅の山水画がふさわしく思われた。一九六五年、春節(旧正月)が過ぎたばかりの時、郭沫若は、傅抱石が南京から送ってくれた新作「游九龍淵詩意」を受け取った。画意は、郭沫若が朝鮮金剛山の九龍淵をうたった組詩である。

白石乱溪流 銀河落九州

樹影偕心定 泉声徹耳幽

あの「皴擦点染」の技法による高山流水、これは決して九龍淵の写実ではなく、画家と詩人の心霊の交流および感動を表わしたものだ。画の中で、遠くに山巒が起伏し、雲霧飄渺(雲霧があたりをただよい、ゆっくり動いている)、

瀑布は雲中より飛流して下り、群峰の中で奔騰する。画の中央に、巨大な山石がけわしくそそり立っている。四周は蒼松、霜葉に囲まれている。山澗のうちに人あり、風にのぞんで眺望す。

故宮博物院の書画鑑定の専門家・単国强がこう評した。

この絵画作品はそうとう珍しく貴重である。この芸術的風格は、傅抱石の成熟期の作品に比べてさらに粗獷（荒荒しく、たくましい）、筆触はさらに大きく、おおいに気魄がある。そして傅氏がずっと得意としていた用墨の特色をよく發揮し、「抱石皴」、「卷雲皴」の技法で、山石を氣勢あふれるすがたに描いた。傅抱石はこの巨幅を完成させて半年後に不幸にも逝去された。郭沫若はその後もこの巨幅をずっと客間に掛けて、故友を偲んでいた。この氣勢磅礴（氣勢があたりいっぱいにみなぎっている）の作品も、郭沫若が『文革』の艱難歲月を過ごしたとき、ずっと寄り添っていた。

数十年にわたって、この巨幅はもとのままでずっと客間に陳列されていた。この芸術珍品をよりよく保存するため、郭沫若記念館は専門家を招いて保存方法について討議してもらった。そしてコロタイプ版技法によって複製を製作して陳列し、原画はしっかり保存すべし、という提案が出された。

（参考）郭庶英『我的父親・郭沫若』遼寧人民出版社 瀋陽二〇〇四）

文献

馬良春、伊藤虎丸編『郭沫若致文求堂書簡』文物出版社一九九七

『日中友好的先駆者―文求堂主人・田中慶太郎―』編輯兼発行者 田中壮吉

極東物産株式会社（東京）発行 非売品 初版第一次印刷一九八七、第二次印刷一九九一

『傅抱石全集』（全六卷） 広西美術出版社二〇〇八（第一卷に「略年譜」あり）

〔附冊〕（年譜収録）

陳伝席『傅抱石』（中国名画家全集） 河北教育出版社 石家莊二〇〇〇

『20世紀中国画壇の巨匠―傅抱石』（日中美術交流のかけ橋）（葉宗鎬作成の年譜を収録） 編集・松濤美術館、発行・読売新聞社

一九九九

瀧本弘之『傅抱石と新興版畫の周辺―《木刻的技法》の出版をめぐる―』

『民国期美術へのまなざし―辛亥革命百年の眺望―』（アジア遊学146） 勉誠出版二〇一一年一〇月

特別陳列〈武蔵野美術大学美術資料図書館所蔵〉『傅抱石の繪画』 東京都渋谷区立松濤美術館一九九五

葉宗鎬『傅抱石年譜』（増訂本） 上海書画出版社 二〇二二

成家徹郎『説文解字の研究』（後編） 大東文化大学人文科学研究所二〇一一

成家徹郎「郭沫若と文求堂田中慶太郎―交流の軌跡―」『人文科学』第十五号 大東文化大学人文科学研究所二〇一〇年三月

「金原省吾の日記」（略称「金原日記」）、傅益瑤「父傅抱石と恩師金原省吾先生とのきづな」『傅抱石展図録』 武蔵野美術大学美術

資料図書館 小平市一九九四

繪画作品資料

井上家蔵「独釣図」 金原省吾『東洋画』

『世界美術全集』16「中国（5） 宋・元」 角川書店一九六五

『世界名画全集』第17卷「中国の絵画」平凡社一九六〇

特別展図録『宋代の絵画』大和文華館 奈良一九八九

『原色日本の美術』29「請求美術（絵画・書）」小学館一九七一

『静嘉堂宋元図鑑』静嘉堂二〇〇二

NHK総合テレビ

2015年1月4日「日曜美術館・中国によみがえる雪舟」

傅抱石の娘・傅益瑤も出演解説

金原省吾の著書（美術関係）

『東洋画概論』古今書院一九二四

『支那上代画論研究』岩波書店一九二四

『絵画に於ける線の研究』古今書院一九二七

『東洋美論』春秋社一九二九

『東洋画』春秋社一九二九

『東洋美学』古今書院一九三二

『構想の研究』古今書院一九三三年初版、一九三七年増訂版

『東洋美術論叢』古今書院一九三四

『唐宋之絵画』（傅抱石による漢語訳）商務印書館 上海一九三五年二月

『支那絵画史』古今書院一九三八

〔「序」で、傅抱石の翻訳『唐宋之絵画』について言及。〕

『牧溪』アトリエ社一九三九

『日本美術論』河出書房一九三九

『日本美術の課題』河出書房一九四〇

『武蔵野美術大学・大学史史料集』第一集

(学校日誌1931年10月～1935年12月5日) 著者 金原省吾

大学史史料委員会編集、武蔵野美術大学発行 小平市一九九九年三月

『武蔵野美術大学・大学史史料集』

第五集「金原省吾日記(1934年)」

大学史史料委員会編集、武蔵野美術大学大学史史料室発行 二〇〇七年五月

第六集「金原省吾日記(1935年)」

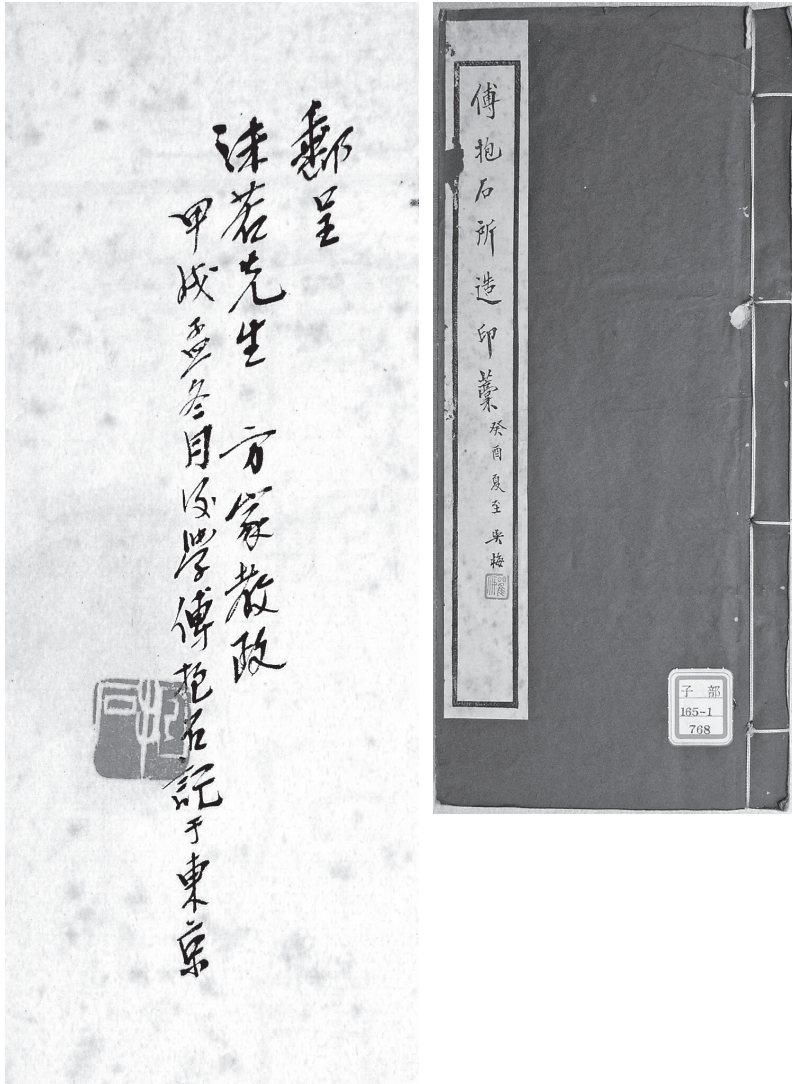
大学史史料委員会編集、武蔵野美術大学大学史史料室発行 二〇〇九年七月

第七集「金原省吾日記(1944年～1946年)」

大学史史料委員会編集、武蔵野美術大学大学史史料室発行 二〇一〇年三月

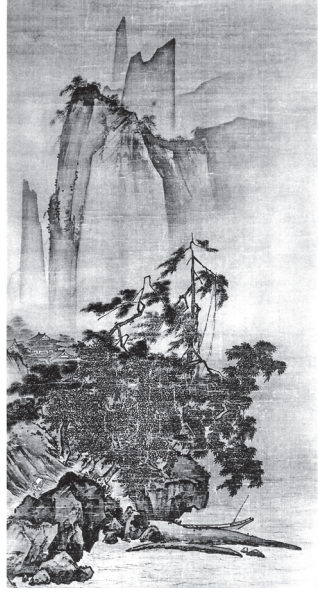
第八集「金原省吾日記(1947年～1950年)」

大学史史料委員会編集、武蔵野美術大学大学史史料室発行 二〇一〇年一二月



図一 傅抱石印譜「傅抱石所造印稿」(全二冊)(アジア・アフリカ図書館郭沫若文庫蔵) 左: 傅抱石が書いた「謹呈の辞」

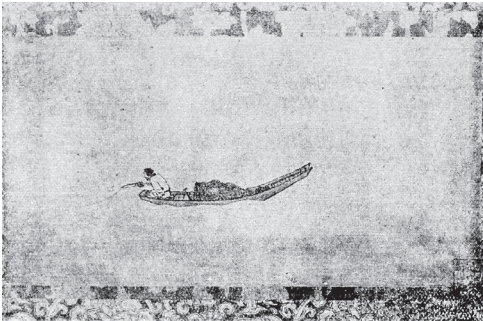
图二 伝馬遠「風雨山水図」(『世界美術全集』角川書店)

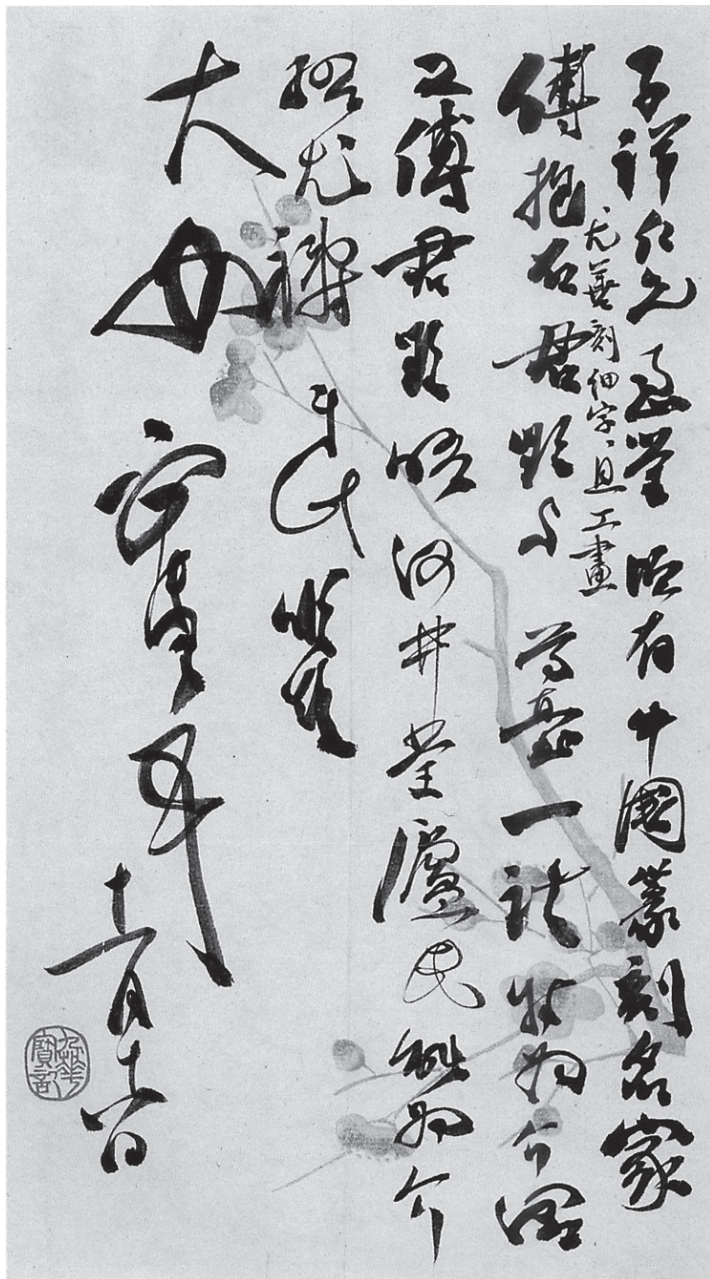


图三 伝夏珪「山水図」
(『宋代の絵画』大和文華館)



图四 伝馬遠「独釣図」
(金原省吾「東洋畫」)

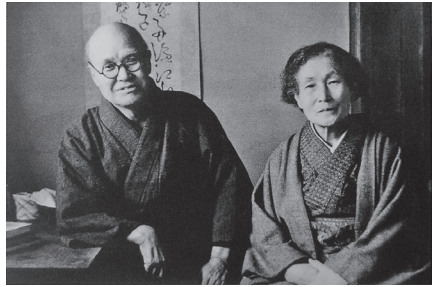




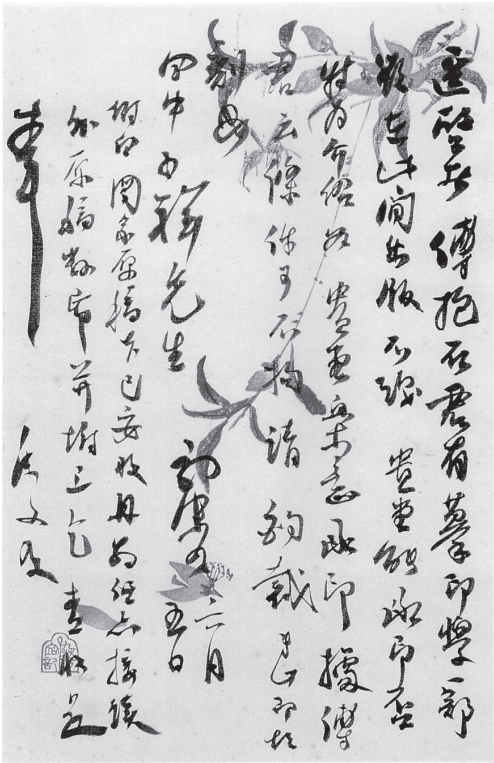
図五 郭沫若が文求堂田中慶太郎に出した書簡 一九三三年十一月十八日（郭沫若致文求堂書簡）文物出版社



図七 傅抱石が金原先生に贈った自分の写真
 (『傅抱石全集』 広西美術出版社)



図六 金原省吾夫妻
 (『傅抱石全集』 広西美術出版社)



図八 郭沫若が田中慶太郎に出した書簡
 (『文求堂主人・田中慶太郎』 一九三四年六月五日)

図九 傅抱石が金原省吾先生に書いた書信（一）（部分） 一九三四年七月二〇日（傅抱石全集） 広西美術出版社

金原先生尊鑑敬啓者^生。上海呈上一函。

想達

左右、本月十日到南京、昨日到南昌一行

平安無事、伏望

釋念、為感

大著唐宋之僧畫、已決定由上海商務

印書館出版

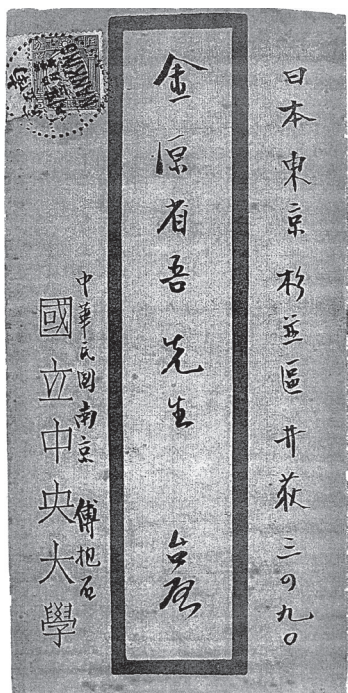
先生之大名、可遍中華矣^生。回日本後、

擬再譯

家中情實前已陳之。先生今次之回國。所
要求之補助。毫無結果。家中尚有負擔。幸
今年變現之要。已卒業義務專科音樂系。
任中世史之音響教師。故對於家庭之
責任。畧可減輕。但仍有極大之困難。若
無特別機會。理想中之留學時間之實現。確
不可能。
今定九月前返東京。先生所囑贈之
書籍及品物。必二奉上。山口先生之印色
及印。亦同時贈來。
履覽全信。甚蒙先生之責。侵成。將
來若能有進境。當永遠銘感。
先生之大德也。



図二一 傅抱石個展会場 一九三五年五月一〇日
(於銀座松坂屋) (傅抱石全集)



図二一 a 傅抱石が金原先生に書いた書信(七)封筒 (傅抱石全集)

中國國民黨中央執行委員會文化事業計劃委員會用箋

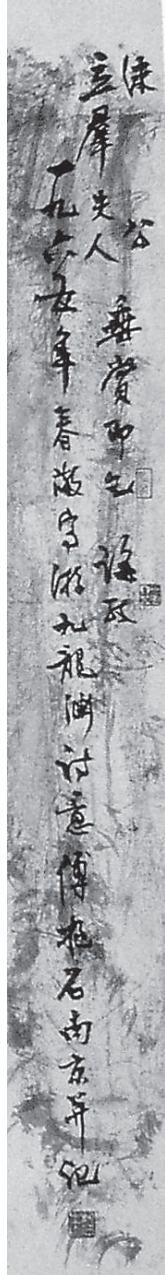
金原先生尊前敬啟者。因病曾往南昌家中
 一次。上週始返校授課。奉到
 賜書及卒業證書一件。不勝拜謝。又承
 先生獎勵及同學會贈予紀念徽章。實深
 感佩。又言語美學之出版。認為光榮之一
 事。至
 先生今年提出博士論文。聞之。尤為榮幸。
 謹祝

中華民國二十一年八月



図一三 a 傅抱石「游九龍淵詩意」(右半部。左下に人物が数人描かれている) (『傅抱石全集』)

図一三 b 傅抱石「游九龍淵詩意」(右端の題画記)



沫 公

立群夫人

垂賞即乞 誨政

一九六五年春 敬寫九龍淵詩意 傅抱石南京并記